

『平成十年度大会シンポジウム』特集・近代思想史における「異郷」としての日本

丸山眞男

一

「近代思想史における「異郷」としての日本」というテーマで、福沢諭吉、内村鑑三、丸山眞男の三人をとりあげるこのシンポジウムで、筆者は丸山眞男について報告する役目を担うことになった。明治期の福沢と内村については、すでに歴史上の人物として、その思想と行動の評価について幾つかの「定説」が成立している。しかし、丸山の場合、優れた思想家としての評価は不動のものであるが、一九九六年八月の逝去後、日もまだ浅く、加えて、丸山個人の『著作集』や『講義録』、『座談』集など著作のあいつぐ公

西田 毅

刊や丸山論の発表が続くなど、まさに今、かれは「時の人」として注目される存在である。したがって、戦中の一九四〇年代から最近の九〇年代までおよそ半世紀にわたって、多彩な言論活動をおこなない、戦後日本の学界と言論界に屹立する知的巨人の全体像を「醒めた眼」で捉えるには、なおしばらくの時間を必要とするであろう。

丸山の学問と思想に対する積極的な評価と並んで、他面、戦後思想界における「進歩派のオビニオン・リーダー」としての丸山が、「進歩派の自己特権化」の構図を成立させたとする批判が、いわゆる国家主義的なグループによる最近の東京裁判史観批判の論調などと重なって、その存在が「偶像」破壊の対象になったことも事実である。しかも、

その「偶像」破壊の声は、大学紛争当時の全共闘世代の新左翼にも共通してみられた批判であるから、それはひとり保守派のナシヨナリストの陣営から発せられた動きだけではない。

これからもさまざまな丸山論が登場すると思われるが、それらポジとネガ双方の見解が交錯する過程で、知識人としての丸山像が次第に確立されてゆくものと思われる。そういう意味で、今必要なことは何かといえ、戦後五四年を迎えた現在、戦後思想を全体として対象化し、戦後思想史における丸山の客観的な位置づけを試みることであろう。

そのためには思想史プロパーの論説だけでなく、敗戦直後から一九五〇、六〇年代の講和論争から安保問題に至る時々の重要な状況発言を含む言動の丹念なフォローと多様な接近視角を設定しながら、その言論活動を再検討し、丸山の思想から二十一世紀の日本に向けてのメッセージとして一体何を引き出すことができるのか、また、継承しうる問題提起は何であるかをあきらかにする作業を押し進めることであろう。

接近視角といえば「異郷」としての日本」という問題設定、つまり、思想形成過程において自らの生まれ育った日本を精神的「原郷」としてよりもむしろ「異郷」視するタイプの思想家として丸山を捉える試みも確かに一つの有意

義な方法といえるであろう。しかし、「異郷」としての日本」を検討すると言っても、福沢、内村、丸山というそれぞれ氣質もちがいが、生きた時代も直面した課題も異なる三人の精神形成のプロセスや思考方法のちがいを無視して、「異郷」の問題を一次的に取り上げて検討することにいささかの抵抗を感じるが、今はその点にあえて触れない。

二

まずはじめに筆者と丸山眞男の著作との出会いについてささやかなエピソードを紹介したい。旧版の『現代政治の思想と行動』（上下二巻）が刊行されたのは、一九五六年から五七年にかけてであった。当時、学部学生であった筆者は早速、読書会を始めたが、そのころの公式的なマルクス主義的政治学か、おそろしく古色蒼然たる国法学的な政治学の教科書しか知らなかった我々学生にとって、「第一部現代日本政治の精神構造」、「第二部イデオロギーの政治学」、「第三部「政治的なもの」とその限界」の三部構成と詳細な「追記」および「補註」から成る本書は、目次や本の体裁が実に新鮮で、まさに新時代の政治学を象徴する書物と映じた。

そこで取り上げられているテーマも『世界』（一九四六年

五月号)に掲載された「超国家主義の論理と心理」をはじめ、「日本ファシズムの思想と運動」、「軍国支配者の精神形態」など日本ファシズム(天皇制ファシズム)のイデオロギー構造や大日本帝国の思想、天皇制精神構造の分析がきわめて斬新で、マルクス主義的な思想の影響が強い五〇年代後半の大学で、ファシズム論といえば統治機構の分析や土台Ⅱ経済的社会的地盤の研究に還元されてしまう状況の中で、まさに「眼からうろこが落ちる」思いで興奮しながら読み続けた記憶がある。また、初歩的な政治学の知識しか持ち合わせていない学生の筆者にとって、ファシズムの物質的地盤の分析ではなく、軍国支配層の意識形態や具体的な人間関係と行動様式を中心に叙述された論文の視角の目新しさ、そして何よりもレトリックの新鮮さに論文の中身にも増して強烈な印象をうけたように思われる。

より系統的に丸山政治学を読む会を学内で組織したのは、筆者が法学部の研究室に残った一九六二年以降のことで、今は故人となったシュペングラーの研究で知られる文学部の八田恭昌らと一緒に『現代政治の思想と行動』や『日本の思想』を読み始めた。読書会には日本思想史プロバーではなく、政治学や社会学、哲学の他専攻のメンバーも入っていたので、テキストは政治学の基本理論や現状分析の資料を中心に選んだのであるがこの会は二、三年続いたかと思

う。そしてこの研究会がベースになって、丸山眞男を同志社に呼ぼうという気運が盛り上がり八田と相談して法文両学会共催で講演会を企画することになった。筆者が講演依頼の手紙を出したところ、講演はお断りしているが研究者との懇談会には喜んで参加したいとの返事をもらい我々は元気づいた。そして、一九六四年一〇月に丸山の入洛が実現し、同志社アーモスト館を会場に学生向けの講演と夜には場所を変えて研究者との懇談会が持たれた。当時、同志社には新町ハウスという教職員の会合場所が今の新町キャンパスの近くにあったが、そこで昭和初期以降の日本の政治状況と丸山の思想的道程を中心とした話があり、その話題を中心に長時間に及ぶ懇談が続いた。当初、若手研究者とのインフォーマルで率直な意見の交換をという丸山の希望であったが、先に述べた読書会のメンバーに加えて、田畑忍、和田洋一、内田智雄、岡本清一といった当時、学内の長老教授も加わって、和気藹々とした雰囲気の中にも「学問・歴史・政治」万般の問題に話題がひろがり、きわめて知的に刺激的な会合となった。ちなみに、学生対象の講演のテーマは、「学問・歴史・政治」と題され、自我の問題から政治にアプローチすることの意義、なぜ丸山が講演嫌いなのかに触れて、民主主義と対話の精神の涵養の必要性について語った。

研究者との懇談会で具体的にどのような議論が展開していったのか、残念ながらほとんど記憶にないが、八田と二人で宿舍の京都ホテルまで丸山を見送り、そこでまた深夜までエンドレストークを楽しんだ。講演というのはどうしても話手から聞き手への一方通行になって双方向の会話ができないこと、フェース・ツー・フェースコミュニケーションの大切さ、自分はプラトンのように偉くはないが、対^{ダイア}話^ワの相手から発せられる質問によって論点を深め問題の本質と事理をあきらかにする筋道をつけることは可能だといった趣旨の話も聞いた。「二本足の学者」という名に恥じない洋の東西にわたる広汎な学殖、時間に頓着しない座談の名手ぶりに圧倒される思いであった。その他徂徠学や福沢研究のモチベーション、新島、内村観にふれて、新島や内村には放っておいても弟子はできるが、福沢の思惟方法の正確な理解はむづかしくその意味で真の理解者が生まれにくい日本の精神風土など、時々断片的に発せられる会話には、いずれも聞き流してしまうには惜しい内容のものばかりであった。

以上、一九六四年秋の丸山の同志社来学の一端を紹介したが、このときに受けた筆者の最大の印象は、その真摯で強烈な批判精神と優れた教育者の資質である。一方的な講演よりもむしろ、車座になって学生諸君と議論を楽しみた

いという丸山の姿勢は講演会でも現れ、聴衆の学生との対話に入ると非常に場内が活気づいて高揚したムードが漂った。当時、丸山本人にとっては迷惑な誤解であったかも知れないが、丸山は安保闘争のオビニオン・リーダーとしてのイメージが強い時期であったので、一人の学生が質問に立って、「先生は安保闘争を指導されましたが……」と言いつつ始めるや、すかさず「指導しません」と訂正する一幕があった。また、マルクス主義の思想的影響をうけたと思われる学生が当日の丸山の講演の感想を述べて、階級的視点の意義を強調すると、「階級とはそもそも何なのか、それは実体概念を意味するのかそれとも機能的概念としてあなただけは階級を捉えているのか」といった調子のやりとりをするなど質問を浴びせながら学生たちを次第に対話と討論の輪の中にひっぱっていった思考の訓練をしようとしている姿がよく理解できた。その日は一〇月初めとはいえ、まだ暑い日であったが、額に流れる汗を拭いもしないで話に夢中になって、目の前の小卓においてあったコーヒークップをこぼす程の熱の入れようで、その真剣な討議の態度は実にさわやかであった。その場の対話による弁証法的な議論の進展を眼のあたりにしながら、教育とはある種の挑発による相手の思考の訓練を必要とする営為なのだという実感をもった。

評論家粕谷一希は、小林秀雄と丸山眞男という「二つの巨大な精神」を対比しながら、丸山が青年学徒を魅惑する特徴として、かれの「ギリギリまで思考を押しつめてゆく思索力」、「酷使ともいえる脳髓の運動の魅力」と挑戦的で論争的な思考と姿勢をあげている。それはまた、二人がその抱懐する思想や志向性、立場、姿勢を異にしながら両者に共通する等質な資質でもあると述べている。丸山を知る人の多くが納得する評言だと思う。丸山のラディカルな批判精神とチャレンジングな思考態度は、「自らのうちに反問を自覚し、自らの思考の過程にダイアローグを遂行していること」と連動していることを粕谷は指摘したが、そのことは近刊の丸山の『自己内対話』が何よりも明瞭に証明している。民主主義と議論、対話を重視した丸山にとって、「対話」とは単に他者との交流を意味するだけではない。それは、「国際交流よりも国内交流を、国内交流よりも、人格内交流を！ 自己自身の中で対話をもたぬ者がどうしてコミュニケーションによる進歩を信じられるのか」(傍点⁽¹⁾は原文。以下断りないかぎり同じ)という「自己内対話」の姿勢に支えられていたのである。丸山の民主主義論と自由

ディスカッション
討 論の意義を強調する基底には、このような確信があったことを見落としてはなるまい。

「自己内対話」とは、「自分のきらいなものを自分の精神の中に位置づけ、あたかもそれがすきであるかのよう⁽²⁾な自分を想定し、その立場に立つて自然的自我と対話すること」であり、自分と反対の意見をおいてそれと対話し議論する、そして両方の意見を調整することを自分の中で各人が行うことによって問題の理解や考え方に深みと厚みを加えること、いわば「他者を他在において把握」する能力の涵養にはそのような努力を必要とする。そして丸山にとって挑戦すべき論敵、「対話」を試みるべき対象は、日本ファシズムであり超国家主義であり、学問的方法としてのマルクス主義であった。丸山とマルクス主義の関係であるが、彼はマルクス主義者ではないが、青年時代に「唯物論研究会」に参加して官憲による執拗な思想取締に悩ませられた。そして『ドイツ・イデオロギー』をはじめマルクス主義から多大の思想史の方法上の影響をうけたことは事実である。しかし、また丸山は、マルクスからマンハイム、そしてウエバー、ボルケナウ、マイネツケという系列で思想史を事実史の「反映」ないしその函数としてだけ捉えるのではなく、思想史の自律性の確立のため苦闘したこと、また、政治現象の経済現象からの独自性、政治過程の固有法則性

への関心が、マルクスからウエーバー、ヘラーという系列の影響下で育成強化され、やがて権力の分析、国家理性、人間行動と組織の関係の分析といった政治学の自律の方面に向かつていった。つまり、自らの思想史研究のための「型」、「形式」の確立にとつて、学問的方法としてのマルクス主義は豊かな栄養源であるとともにチャレンジな論争敵手でもあった。

丸山はそのパーソナルヒストリーを自己の研究史や思想史方法論の確立の議論との関連でしばしば語っている。たとえばそのような資料として一九七八年に発表された「思想史の方法を模索して——一つの回想」⁷をあげることができよう。

この論文ではかれの思想形成と思想史的方法の確立が詳細に論ぜられている。すなわち、旧制高校時代のリッケルトやヴィンデルバントら新カント派哲学からうけた思想的影響からマルクス主義哲学の方法論、とくに模写説、つまり「現実」と「表象」を対置して認識は「表象」による「現実」の正確もしくは不正確な模写であるという考え方への疑問が萌したこと、そして、大学時代のK・マンハイムの『イデオロギーとユートピア』の知識社会学にふれてその疑問が克服され、のちの著者自身の方法論の形成に連なっていた過程が述べられている。マルクス主義の「反映論」

とドイツ観念論的な思想、精神の内的矛盾を通して思想が自律的に進展するものと捉える二つの立場のあいだの架橋の問題に苦しんだが、新カント学派、それも西南ドイツ学派の哲学に親しんだ経験が、マルクス主義の「模写説」をはじめ、その社会、国家理論の全面的受容を阻む原因となったこと、そして、丸山がマルクス主義の方法論にコミットするのを妨げた他のものがマンハイムの知識社会学であること、知識社会学は認識論をも包括する社会理論であつて、それはカント的認識論とマルクス主義のイデオロギー論との双方に対するいわば二正面的「挑戦」を内包していたことなどが言及されている。

丸山の思想史、精神史へのアプローチにマンハイムの書物が決定的な影響を与えたことがヴィヴィッドに述べられているが、具体的に知識社会学 *Wissenssoziologie* から何を学び取ったのか。『日本の思想』や『日本政治思想史研究』をはじめとする一連の思想史研究の読者には周知の事実であるが、そこには「思惟様式」 *Denkstil*、⁸「視座構造」 *Aspektstruktur* 等のマンハイム独特の用語が使用されている。そして、本居宣長の儒教批判様式を「イデオロギー暴露」の一つの典型とみるのは、やはりマンハイムの「虚偽暴露」、「虚偽意識」といった範疇の使用例である。さらに、丸山思想史学的方法的特色のもう一つの実例である世界像

や思考範疇のレベルに着目する仕事は、それらを個々の理論や学説と下部構造との間の媒介項として捉えるマンハイムやF・ボルケナウから示唆をうけているのは丸山が明言するところである。そして、マンハイムの理論における遠近法ペルスペクティヴィズム的な見方から、対象と認識との一対一の対応関係をつきくずして、精神史と社会史の文脈の中におきながら、同時に精神史特有の発展形態を明らかにする鍵を見出したのである。この丸山の方法的実験は「近世儒教の発展における徂徠学の特質ならびにその国学との関連」その他の徳川思想史研究にあらわれている^⑧。

戦後の「日本の思想」をはじめとする一連の作品でも西洋のキリスト教にあたる思想的座標軸の欠如や「伝統」思想と「外来」思想の雑居的特性、「新たなもの、本来異質的なものまでが過去との十全な対決なしにつぎつぎと摂取される」思想の継受のスタイルへの論及等、近代日本が背負ってきた思想の存在様式や批判様式が鋭く分析されている。丸山の思想史研究にM・ウェーバーの影響を見る人は多いし、本人も学生時代から戦中にかけてマリアンネ編の『政治論集』等の著作を通じて関わりがあったことを認めている。すなわち、ウェーバーから「ヒント」とか「触発」とかでは到底表現できないほど、学恩を負っている^⑩」が、「思想史の方法論」という主題をいざ前面に立てて、過去を

ふりかえって見ますとわれながら意外に思うほど、これこそウェーバーから学んだという焦点がクリアに浮かび上ってきません^⑪」と述べている。

しかし、戦前に発表された「神皇正統記に現われたる政治観」(一九四二)における親房の「心情の倫理」と「責任の倫理」の関係の考察や、戦後の「戦争責任論の盲点」(一九五六)で「政治的責任は峻厳な結果責任」であると明言したその所説は、ウェーバーの「心情倫理」と「責任倫理」論、「責任倫理」が「結果責任」を意味し、政治的責任における「結果責任」の重要性を説いた所説との符号を知る者にとって、「思想史の方法の次元で、とくに学ばなかった」との丸山の回想はや、意外の感がある。

ついでに言うならば、議會制や政党と官僚制、リーダーシップ、行政幹部と行政手段との結合と分離の関係、支配の正統性といった「政治学の理論的諸問題」や「日本の現実政治を観る目を養ってきた書物」として、丸山は先にあげた『政治論集』をあげている。

四

東大法学部に「東洋政治思想史」講座が開設され、丸山がその担当者に就くいきさつについて次のように語ってい

る。

丸山が助手に採用された昭和二年（一九三三）から昭和五、六年時代は、東大の法経両学部にとって「歴史上最悪の受難時代」で、「大学に対する国家主義乃至は右翼的な立場からの攻撃と権力の弾圧は（中略）個々の教授を追放するという段階から、さらに進んで学部の問題へ、ついには大学全体を肅正すべしという問題にエスカレートして行った」時期である。津田左右吉事件が起つたのは昭和一四年末から一五年三月にかけてであり、それはまさに「危機のピークの時期」であった。津田博士の東大出講をめぐる「原理日本」社を中心とする右翼的な日本精神主義者の攻撃や最終講義のときの津田博士の「吊し上げ」の様子、津田の四著書発禁処分や著者と発行元の岩波書店に対する起訴については、「南原先生を師として」や「ある日の津田博士と私」に詳しい。とにかく、昭和一四年（一九三九）に「東洋政治思想史」講座の設置が決まり、この講座の初代の担当者に南原が「三顧の礼」をとって当時、早稲田大学教授で、早稲田以外に出講したことのない津田を引き出したのである。一年前に文学部に「日本思想史講座」が開設され、国粹主義者の平泉澄が担当、時局に沿った国体明徴講義がおこなわれていた。

昭和一〇年の天皇機関説事件と国体明徴問題以降、全国

の主要大学に国体明徴講座が設けられたが、「東洋政治思想史講座」は設置を認めた文部省の期待とはちがって、南原はこの講座を「純粹に学問的なもの」、「学問的な意味で批判的なもの」にしなければならないと考えていたという。それは南原の時局への抵抗の姿勢でもあった。国体明徴講座の開設をすゝめていた一九三〇年代の文部省の政策のなかで生まれた「東洋政治思想史」講座は、津田に続いて村岡典嗣（当時、東北帝国大学教授）が非常勤講師として担当、その後、三代目に丸山がこの講座を専任教員として担当するようになったのは昭和一七年（一九四二）、助教教授就任三年目のことである。

なお、それまでに丸山は南原のすゝめで平泉の「国体講座」を毎回聴講しており、さらにまた同じ文学部の和辻哲郎が担当する日本倫理思想史の講義も聴講している。立場や思想傾向の異なる平泉、和辻両教授の講義を同時平行的に聴いたのであった。

植手通有氏は「歴史の逆説」という言葉を使って、日本政治思想史家丸山の誕生を述べている。すなわち、丸山は戦後になって、天皇制国家の思想構造に鋭い批判的分析のメスを加えたが、かれが「日本政治思想史の研究をはじめるきっかけを与えたのが、実は政府による『国体講座』設置の動きであった」こと、その「『国体明徴』運動は結果とし

てまさに鬼子を生んだ」と言つて、歴史には「人間の知力ではあらかじめ計算できないような逆説がみちている」⁽¹⁵⁾ことに驚いている。

丸山は敗戦直後から日本のファシズム、天皇制国家にみられる日本近代の矛盾や特殊性の究明について精力的に研究発表を続けた。

天皇制の精神構造との格闘は、その迫力ある論調がレントゲン写真で照射したように透明な構造分析とあいまって読者に強烈なインパクトを与えたが、その後、一九五〇年代後半には、方法的にはマルクス主義と対象的には天皇制支配が「実感的には風化」したため、かれは「精神的にスランブ」に陥っているという発言（一九五八年ころ）があり、その発言とどのような内的関連があるのかうまく把握できないが、やがて「文化接触による思想変容の問題を日本思想史の考察に大きく導入しよう」と試みる⁽¹⁶⁾。方法に重点が移動したとその方法上の変化にふれている。それは大学の講義内容の変化と連動している。すなわち、一九四八年の『丸山眞男講義録』は、封建的思維様式の解体から近代的思想様式へという視点から徳川思想史を論じており、その論理の前提には、西洋にみられる普遍的な歴史の発展段階が基本的には日本にも妥当するとし、その点が中国と異なる日本の特質であるという認識がある。青年期にマルクス主義

をかくぐり、そして方法的にマルクス主義に長いあいだこだわり続けたいわゆる「マルクス以後派 Post Marxist」（「非マルクス無視派」）を自認する丸山が、戦前の「日本政治思想史研究」がマルクス主義的な歴史認識論の「大きな網のなかにあった」ことを率直に認めている。徳川思想史の講義を記紀の時代にまで遡及させたのは一九五九年以降であり、一九七二年に発表された「歴史意識の「古層」」や七九年の「日本思想史における古層の問題」、八四年の「原型・古層・執拗低音—日本思想史方法論についての私の歩み—」、八五年の「政事の構造—政治意識の執拗低音—」に結晶する幾多の日本思想史の「執拗低音」を探る論文の原型は、六三年以降の講義の序論の部分で、「世界像の「原型」(Prototype)」というタイトルの下に提示されている⁽¹⁷⁾。

ここに言う世界像の「原型」とは何を意味するのか。丸山の言によれば、「外来」思想を「日本化」させ、修正させる契機として繰返し作用する思考のパターン」のことで、それは歴史意識、倫理意識、政治意識の三つの領域の原型構造から成っている。それらはコスモスの意識または「歴史意識の「古層」」（歴史意識）、「Dasso osunatio 執拗な低音音型」、「低音部に於て執拗に繰り返される音型」（倫理、政治意識）という音楽用語を使って論ぜられた。政治意識の古層についてはまた、「政事の構造」という表現で論ぜら

れている。そして、日本思想史においていつの時代でも高音部に現れる「主旋律」は儒教、仏教にはじまって、「自由主義」、「民主主義」、「マルクス主義」といった教義化したイデオロギーで、すべて外来思想であり、古層というのは「主旋律ではなくて、主旋律を变容させる契機」¹⁸⁾なのである。なお、三つの柱のうち倫理意識の古層（執拗低音）については、松沢弘陽氏の解説によれば、プリンストン高等研究所の報告ペーパー（英文原稿）は残っているが、未だ公刊されていないことである。¹⁹⁾

このような文化接触の問題を幕末維新时期だけでなく、日本思想史を古代からその視点で本格的に再検討する問題意識が芽生えたのは一九六一年の渡米体験にある。日本史上の二大変革である大化改新・律令制の確立および幕藩体制の崩壊と明治維新の成立が、それぞれ古代の隋唐帝国と幕末の西洋の「外圧」という二つの異質なカルチュアとの接触到に基因すること、そしてこのインパクトの問題を強く意識して、文化接触によって流入してきた異質な外来思想が元のものとは異なる思想へと修正されるその変容の仕方に根本的なものの共通したパターンを究明しようとする方法論の採用へと向った。この普遍的発展段階論から異文化接触への関心の移行は、丸山における「戦後」の終わりとも理解せられるし、六〇年代安保直後の最初の西洋渡航体験に

よる視園の拡大、というよりもむしろ、それまで長年にわたってあたためてきた比較世界的関心が渡航体験によって一気に熟成したとも考えられるのではないか。²⁰⁾

五

戦後の丸山の研究対象が日本のファシズムや天皇制国家の思想構造の究明、そして幕末を含む明治思想史研究にあることは、すでにふれた通りである。福沢研究は戦中から続けられていて、戦後、「福沢に於ける「実学」の転回―福沢諭吉の哲学研究序説―」、「福沢諭吉の哲学―とくにその時事批判との関連―」をはじめ『文明論之概略を読む』にいたる多数の優れた論文が公表された。福沢研究と並んで荻生徂徠研究も徹底してなされた。戦中の代表作に加えて戦後の講義録、「太平策」考、「荻生徂徠の贈位問題」等の徂徠研究がある。徳川思想史研究では徂徠の他に山崎闇斎研究（「闇斎学」と「闇斎学派」）や佐久間象山研究（「幕末における視座の変革―佐久間象山の場合―」）がある。戦後の明治思想史研究は、思想家個人の研究としては、福沢の他に陸羯南、中江兆民、岡倉天心、内村鑑三等の名前をあげることができ、が活字として発表された個別思想家の研究はさほど多くない。

しかし、丸山の著作には「明治国家の思想」や「日本の思想」に代表される包括的な日本思想史の構造分析がある。

とりわけ、大きなインパクトを与えた「日本の思想」が企図したものは、その「まえがき」にあるように、単に「政治思想とか社会思想とか哲学思想とかいった個別領域の思想史ではなくて、そういったジャンルをひつくるめて、各時代の「インテリジェンス」のあり方や世界像の歴史の変遷を辿るような研究」、ヨーロッパの思想史学でいうところの History of western ideas や Geistesgeschichte のような形の日本思想の分析であった。日本において「時代の知性的構造や世界観の発展あるいは史的関連を辿る」研究の蓄積は乏しく伝統化していない状況を指摘して、本書で思想的座標軸の欠如や「超近代と前近代が独特に結合している日本の「近代」の性格」を自己認識する意味、異なる「思想が対決と蓄積の上に歴史的に構造化されない」という「伝統」の存在、その無構造の「伝統」がいかなる思想の継起と変容のパターンとなって現れるかといった問題、近代日本において機軸として「国体」がどのようにに創出され、機能したのかを「臣民の無限責任」と「国体」の精神内面への浸透」を通して究明したり、天皇制政治構造における「無責任の体系」、「近代日本における制度と共同体」、いわゆる「実感信仰」と「理論信仰」に象徴される二つの思考

様式の対立など幾多の「インテリジェンスのあり方」が抽出された。

丸山は「日本の思想」は、「われわれの現在に直接に接続する日本帝国の思想史的な構造をできるだけ全体的にとらえて、現にわれわれの当面しているいろいろな問題——知識人と大衆・世代・思想の「平和的共存」・伝統と近代・転向・組織と人間・反逆や抵抗の形態・責任意識・社会科学の思考と文学的思考など——がそのなかで発酵し軌道づけられてゆくプロセスなり、それらの問題の「伝統的」な配置関係を示そうという一つの文字通りの試図」であると断っている。したがって「日本の思想」は決して日本思想史概説や概論ではなく、著者が「大学卒業以来当面したさまざまな学問的課題と、それを追求する過程で不可避免的に刻みつけられた（中略）思想的道程とが流れ込んでおり、それと同時に、これ以後の関心方向の新たな起点」となり、長年のあいだ丸山が思索してきた問題や視角を統一的に関連づける試みの契機となった論文であると述べている。ここで言う「関心方向の新たな起点」とは何なのか。

丸山の説明は多義的で晦渋であるが、この問題は日本の思想的伝統をどう評価するかという論点と重大な関わりをもつ。よくみられる丸山批判のパターンに、「日本の精神構造なり日本人の行動様式の欠陥や病理」を暴露したり、

西洋の近代を「理想」化して、「それとの落差で日本の思想的伝統を裁く」といった類のものがある。それに対して丸山は、そのような批判がある面であつて、それを否定しない。そのような特徴がこれまでの仕事に現われているのは、「戦争体験をくぐり抜けた一人の日本人としての自己批判」あまりにすりきれた言葉であるけれども、これよりほか表現の仕方がない——を根本の動機」としていること、戦前と戦中期の日本の「病理現象」を「一時的な逸脱ないしは例外事態として過去に葬り去ろうとする動向にたいする強い抵抗感の下に執筆されたために、そうした病理現象の構造的要因を思想的観点からつきとめることにおのずからアクセントがおかれたからである」と述べている。この丸山における「戦争体験」の問題、「被害者意識と世代的論的発想とを共有した」戦後知識人の「悔恨共同体」の形成、そして解放感と自責感がブレンドされた敗戦直後の精神的状況といった問題は、丸山思想史学の解明にとって看過できない重要な前提である。

丸山にとって真の近代化とは何か。

戦後復員してはじめて発表した「近代的思惟」（一九四六）で、今後の自らの研究課題が「日本に於ける近代的思惟の成熟過程の究明」にあることを宣揚している。そしてそれは、「大日本帝国」の崩壊と価値体系の転換という「客観

的情勢の激変」とは無関係に戦中から持続している問題意識と何ら変わるところがないことを述べて、我国において「近代的思惟は「超克」どころか、真に獲得されたことすらないと云う真実」を確認して、かつての「近代の超克」論争を批判すると同時に「超克」説と対極の地点に立つ近代「無縁」説にも反駁している。「病理現象の構造的要因」の究明とは別に、いわゆる「日本の「良き」思想的伝統」を抽出する作業は「二の次」になったことは自認している。しかし、丸山は「日本思想史における思想の継受の仕方」、「外来」思想の移植と「伝統」思想の対応形態」を「全体として、問題にし、そのなかで個々の思想を位置づけることなしに、自己の好みや、政治的課題に直接適合するものを「伝統」としてすくいあげる」態度に強い危惧を抱いた。

そこで、「日本の思想」で試みたのは、日本において「個別的思想の「座標軸」の役割を果すような思想的伝統が形成されなかつた」という問題と、およそ千年をへだてる昔から現代にいたるまで世界の重要な思想的産物は、ほとんど日本思想史のなかにストックとしてあるという事実とを、同じ過程としてとらえ、そこから出て来るさまざまな思想史的問題の構造連関^⑤の把握に努めることであつた。

そして思想を「可能性においてとらえる」方法は、それ以後の「開国」（一九五九）や「忠誠と反逆」（一九六〇）と

いった論文で照明が試みられている。

さらに、「日本人の自己批判」のモチーフと並んで「日本の思想」では、思想的伝統の「評価的意味」を引き出す配慮もなされている。具体的には危機的状況においてよくみられる「伝統」への思想的復帰の仕方としての「思い出」による突然変異的な「伝統」回帰のパターンにふれて、それが、外来思想が「歴史的構造化を解体され、あるいは思想的的前提からきりはなされて部品としてドシドシ取り入れられる結果、高度な抽象を経た理論があんがい私達の古い習俗に根ざした生活感情にアピールしたり、ヨーロッパでは強靱な伝統にたいする必死の抵抗の表現にすぎないものがここではむしろ「常識」的な発想と合致したり、あるいは最新の舶来品が手持ちの思想的ストックにうまくはまりこむといった事態⁽²⁶⁾」の発生と結びついていること、新たな思想の受容が伝統的なものと十分な対決を経ないで、つぎつぎと摂取されるいわば「対決と蓄積の上に歴史的に構造化されない」日本の精神的伝統のゆえに、「新たなものの勝利はおどろくほど早」く、「過去は過去として自覚的に現在と向き合わずに、傍におしやられ、あるいは下に沈降して意識から消え「忘却」されるので、それは時あつて突如として「思い出」⁽²⁷⁾として噴出する」と説明し、その背景には思想的座標軸の欠如、「精神的雑居性」の伝統と深い関

連があると指摘している。唯、日本人の新しい外来文化への敏感な反応と普及の早さと同時に、日本文化には「過去のなもの」極端には太古的なもの——の執拗な持続」があることに丸山がすでにこの時点で言及している点に注目したい。

この二つのあい矛盾する契機の統一と相互関連を究明し、それが日本の近代化過程でどのように機能したかを分析する必要性を強調し、その認識努力によって、上の「思い出」を自覚的に駆使するならば、それはもはや突然変異的な転向⁽²⁸⁾というこれまでのパターンのたんなる繰り返しとはならない」とその評価的意味を引き出すための処方箋を提示している。

前述のように、丸山が講義で思考様式の「原型」^{プロトタイプ}に論及するのは一九六四年度の講義録からであり、それが後に「歴史意識の「古層」や「原型・古層・執拗低音」へと発展してゆく古層論の成熟過程を考えると、ここに述べられている「関心方向の新たな起点」が意味する「内面的な意味」が日本の思想的伝統の本質への着目にあつたことがよく納得できる。しかも、「縦の線」のマルクス主義的な発展段階論的な歴史認識から「横からのインパクト」(文化接触による「開国」の思想的意味——それは、鎖国から開国への歴史的経験と「閉じた社会」から「開かれた社会」への

移向という象徴的意味の二重構造からなる―や日本文化の深層を探索の問題に観点の比重がシフトしてゆくであろう分水嶺の地点にあるのが五七年発表の「日本の思想」ではないだろうか。

六

これまで筆者は丸山の思想形成と思想史的方法の確立、そして戦後における思想史研究の方法上の変化を中心にその日本政治思想史研究の特色を概観してきた。

このシンポジウムでとりあげられた福沢、内村と同様、丸山も近代日本における西洋の知の受容の系譜に連なる知識人であることは異論のないところであろう。

一九七〇年代以降に発表された古層論の反響の一つに「ベシミスティックな日本論」という批判とともに、当時、一部で流行したハーマン・カン流の現代日本礼賛論とダブった日本回帰論とうけとめる人々があった。²⁹しかし、丸山の古層研究は決してスウィーピングな西欧批判と抱き合わせの保守的な日本回帰論ではないし、いわんや大学紛争後の「転向」現象でもない。むしろ丸山は、日本の高度経済成長期のそうした日本礼賛論や日本回帰論の思想傾向への強い警戒心を抱いていた。丸山が自ら語るところによれば、文化接触への関心は遠く五〇年前の「敗戦の衝撃」に

まで遡りうる。つまり、敗戦直後の焼け跡にみた「大日本帝国の価値体系」の崩壊とそれに続く「精神的なアナキーの時代」の目撃が、「かねて勉強していた幕末維新のときの精神状況と似たところがあつて、ダブルイメージになった」こと、そしてさらにその後の一九六一年の外遊体験で痛感した文化接触の意味の大きさを述べている。³⁰この敗戦体験がやがて「開国」論文の発表（一九五九）となり、六一年の西洋体験後の文化接触と文化変容の思索が古層論に体系化されてゆくと考えられる。

実際、今回、丸山著作集を読み返して実感したのであるが、戦前と戦後における思想史研究の基本的な問題意識の整合性と状況発言のスタンスにぶれがないのに驚いた。現状と理念の不断の緊張関係の持続を説く丸山にとってそれはいわば自明の理、当然の姿勢といえるかも知れない。

ところで、「異郷としての日本」を考察する場合、どうしても丸山の近代認識と天皇制支配の分析、とくに天皇制国家にみられる日本近代の前近代性、特殊性の強調は看過できない論点である。

かつて、天皇制の無責任の体系を「神輿」、「役人」、「無秩序」の図式を用いて分析したかれは、絶対的な価値を体現する天皇（精神的権威と政治的権力の所有）、個人の内面と外面支配の問題、私的領域と公的領域の未分離、個人の内

面の自由、私事の自由が認められないこと、天皇への近接度が個人や集団を評価する基準となること、陸軍に代表される独善意識と独裁的権力の不在、抑圧移譲の原理等の特性を抽出し、日本近代の特異性が鋭く剔抉された。その際、丸山にとって「理念型」としての近代は何を意味するかという問題は、「である」と「する」こと⁴¹をはじめ幾多の論文でふれられている。そこでは身分や家柄、資産など属性の価値（「クオリティ・バリュー」R・N・ペラー）に対する機能の価値（「パフォーマンス・バリュー」）の優位、つまり、ある持続的な「状態」よりも現実的な機能と効果を問う近代精神のダイナミックスは、「である」論理から「する」論理、「する」価値の相対的な重点の移動によって生まれること、近代社会は分業と多様な役割の関係によって成り立つ社会であること、業績本位と機能集団の優位性等の諸原理を引き出しながら前近代と近代のちがいをあきらかにしている。そして、現代の日本には、「非近代」と「過近代」の両側面があり、「する」価値と「である」価値の混在と混乱、両価値の倒錯現象がみられると診断している。この指摘に関連して、学問や芸術における価値とは何かを問い、アンドレ・シエグフリードの言葉を引用しながら、芸術や教養は「果実よりは花」で、それがもたらす結果よりも「それ自体に価値がある」として、文化の価値基準は、効用や

能率原理で決められないと述べて、業績至上主義の「する」価値が安易かつ無批判に学問の世界に浸透することの危険性を指摘し、文化的な精神活動では「休止」が必ずしも怠惰を意味せず、思索や古典の読書といった価値の蓄積が重要な意味をもつことを強調して、現代日本の知の世界に要求されるのは、「ラディカル（根底的の）な精神的貴族主義がラディカルな民主主義と内面的に結びつくこと」であると主張している。

徳川思想史研究をテーマとして学生生活のスタートを切った丸山は、一貫して日本の政治思想を研究対象とした。その点、ニーチェやキェルケゴール研究から日本文化史研究に進んだ和辻哲郎やランボー、ドストエフスキーから本居宣長に至る思索の跡を残した小林秀雄とちがいで、「二本足の学者」丸山の場合、研究の対象は生涯を通じて日本である。しかし、小論でみたように、その時代の対象は近世、近現代から始まってやがて、日本古代の古層論へとひろがりを見せてゆく。研究方法もマルクス主義や弁証法的認識論の強い影響から異質的な文化接触と変容のあり方といった「横から」の衝撃へと比重が変わっていった。

このように時代や方法上の関心対象のアクセントの推移ないし変化はあっても、日本社会の分析において示された「病理学的」アプローチ、「自虐」的分析の弁証と「自愛」

主義の批判、日本近代の特性としての超近代と前近代の同居性の指摘といった学問研究のモチーフは、生涯一貫してみられる姿勢であった。丸山がライフワークにしたのは福沢研究であるが、丸山の「日本人の思考様式と日常的な生活態度に対するその透徹した批判」、「惑溺」からの解放、自主独立のすゝめ、主体性の強調、価値判断の相対性や状況と倫理の緊張関係の持続などに、福沢の優れた思想的継承の典型をみる思いがする。

内村と丸山の関係は、丸山のキリスト教理解の問題もからんで、簡単に結論を引き出せないが、その内村論（内村鑑三と「非戦」の論理^①他）にみられる内村の信仰に根ざす理想主義と反戦論のもつリアリズムの評価は、戦後の丸山の「平和問題談話会」での言動や「憲法問題研究会」を中心とした憲法九条擁護論と通底するものを感じとることができ。また、丸山が、ふだん強調してやまない個人の内的規範原理の確立とキリスト教倫理の関係、キリスト教世界像の把握の特色など興味深い問題が多数存在する。

かつて、丸山は「外線導入」とオリジナリティーの問題について、道元と天竺、徂徠と原始儒教そして内村と聖書密着主義の例をあげて、日本でオリジナルな仕事をした人はすべて、日本の精神風土と無媒介にそれら外国の原典、古典と直結したことを述べている。^②

「媒介」の意味をさらに綿密に検討する必要があるが、丸山の場合、マルクスやウェーバー、マンハイムなどの西洋の古典を非常に自由に読んで、方法としての西洋を駆使しながら、日本思想の構造の解明に立ち向った思想家であるという評価に関しては、大方の支持が得られるところであらう。

註

- ① 植手通有氏は「超国家主義の論理と心理」の「解題」で、丸山がこの題名を決めたいきさつにふれて次のように述べている。「ジャーナリスティックな感覚の鋭い丸山は、敗戦前後に連合国側の西洋人が日本のナショナリズムにたいして用いていた「超国家主義」という言葉を借用し、それに「論理と心理」というその当時としてはかなり珍しい言葉をつけて題名とした」（『丸山眞男著作集』第三巻 一九九五年 岩波書店 三六五頁）そうだが、当時の筆者には、無論そのような事情は知る由もなく、また、丸山がK・マンハイムのいう「学問のジャーナリスト」という言葉があらはまる特徴をもった学者であることも全然分からずに唯、レトリックと使用される範疇の斬新さに瞠目していたに過ぎない。

- ② ③ 柏谷一希「対比列伝——戦後人物像を再構築する——」

- 新潮社 一九八二年 四〇頁。

- ④ ⑤ 『自己内対話』みずす書房 一九九八年 二五二頁。

- ⑥ 丸山は東大助手に採用されたとき、恩師の南原繁から

方法論の上ではそれまでの丸山の立場や勉強を一旦白紙に戻して新たに出発せよと申しわたされ、「思想の存在拘束性」という考え方では思想史はダメ」だと注意されたことを回想している（「南原先生を師として」、『国家学会雑誌』八八巻七・八合併号 一九七五年、『丸山眞男集』第十巻 一七九頁）。

(7) 前掲『丸山眞男集』第十巻 三三—三四七頁。

(8) 『日本政治思想史研究』「あとがき」一九五九年 東大出版会 五一—六頁。

本書に収められた第一章「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連」、第二章「近世日本政治思想における「自然」と「作為」——制度観の対立としての——」二論文のライト・モチーフが「封建社会における正統な世界観がどのように内面的に崩壊して行ったかという課題」にあり、「この課題の解明を通じて（中略）広くは日本社会の、狭くは日本思想の近代化の型、それが一方西欧に對し、他方アジア諸國に對してもつ特質」の究明を意図したことがあきらかにされている。そして、第一章で「狭義の政治思想に視野を限定せず、むしろ徳川封建社会における視座構造 (Aspektstruktur) をなした儒教的（特殊的には朱子学的）世界観全体の構造的推移をなにより問題としたこと」の理由は、「そのことが徳川封建体制の崩壊の必然性を思想的な側面から最も確実に実証すると考えたから」である。それは「近代性の程度では最低のレヴェルにまで下って、その最も固定性の強い精神領域しかも最も「抽象的」な思考範型での内面的な崩壊がどこまで検索されう

るかという一つの極限状況のエクスペリメントなのであって、この検証で、下部構造の変動の衝撃が認められれば、ヨリ流動的なヨリ政治的現実に接続する部面での解体過程や下部構造との関連は比較的容易に把握しようと考えた」こと、「およそ思想史の方法において単なる「反映論」に陥らずにゆる下部構造と上部構造の関連を具体的に解明して行くことは最も困難であり、ここにその問題を立ち入って論ずる限りではないが、思想の内在的な自己運動の抽象的な否定でなく、そうした自己運動自体を具体的普遍的たる全社会体系の変動の契機として積極的に捉える努力を試みない限り、思想史的研究と社会史的研究は徒らに相交わらぬ平行線を描くのみであろう」と述べている。ここには「視座構造」、「世界観全体の構造的推移」、思想史的側面からの「徳川封建体制の崩壊の必然性」の実証、「思想の内在的な自己運動」を「全社会体系の変動の契機として積極的に捉える努力」といった丸山の独自の思想史研究の方法論と接近視角が明示されている。

(9) 『日本の思想』一九六一年 岩波新書 一二頁。

(10) (11) 「思想史の方法を模索して——一つの回想——」『丸山眞男集』第十巻 三三—六頁。

(12) Max Weber, *Politik als Beruf*, 1919, 脇圭平訳『職業としての政治』一九八四年 岩波クラシックス 八九—九〇頁。

(13) 「南原先生を師として」『丸山眞男集』第十巻 一八〇頁。

(14) 同右 一八七頁。

(15) 植手通有「解題」『丸山眞男集』第一卷 三三三頁。

(16) 「思想史の方法を模索して」『丸山眞男集』第十卷 三
四二—三四三頁。

(17) 因みに、六四年『講義録』では「第一章 思考様式の
原型」一 基盤 二 原始的世界像と価値体系 三 歴史
像と政治観」となっており、六七年『講義録』では「第一
章 歴史的前提」のタイトルの下に「第一節 日本の文化型
における地理的および風土的契機 第二節 思考様式と世
界像の「原型」 第三節 政治的諸觀念の「原型」」の節が
設けられている。内容も主題の拡がりや分析の緻密さは年
次が進むに従って高くなっている。なお、『講義録』はい
ずれも東大出版会から刊行されている。

(18) 「日本思想史における「古層」の問題」『丸山眞男集』第
十一卷 一八〇—一八一頁。

(19) 松沢弘陽「解題」『丸山眞男集』第十二卷 三七五頁。

(20) 帰国後の丸山が時局発言をひかえた点について、当時
「進歩的文化人」丸山の保守化あるいは「後退現象」を批
判する風潮があったことは事実である。それは、六〇年安
保の時に丸山が総合雑誌や新聞を通じて「戦後民主主義」
の旗手として活躍するイメージが広く流布したことに関係
していると思われる。丸山と「戦後民主主義」、「市民主義
政治学」の問題は別に検討する必要がある。

(21) 『日本の思想』一九六一年 岩波書店 一八四—一八
五頁。

(22) 同右 一八五—一八六頁。

(23) 「近代的思惟」『丸山眞男集』第三卷 三—四頁。

(24) (25) 『日本の思想』一八六—一八七頁。

(26) (27) 同右 一二—一四頁。

(28) 同右 一八八頁。

(29) 「森有正氏の思い出」『丸山眞男集』第十一卷 九七—
九九頁。

(30) 「日本思想史における「古層」の問題」『丸山眞男集』第
十一卷 一七九—一八〇頁。

(31) 「『である』ことと『する』こと」『日本の思想』一七九頁。

(32) 「武田泰淳「士魂商才」をめぐる——近代日本と士魂
商才——」『丸山眞男集』第八卷 一八一—一九頁。

(同志社大学教授)